

墓

宮本百合子

青空文庫

幾枝はすっかり体を二重に曲げ、右の肱を膝にかつて、良人の鼻の上に酸素吸入のカツプを当てがつていた。病床の裾近いところに、行燈形のスタンドがともつてある。その光りで、羽根布団の茶と緑の大模様がぼんやり浮き立つて見えた。酸素瓶のバルブを動かしていた看護婦が、ささやきで夫人に注意した。

「もう、酸素があと一本しかございませんから……」

母の陰に坐つていた尚子がそつと席を立つた。

「——織田さんにいえばわかりますよ」

尚子は、ふりわけにして下げたおさげをふさふさゆすつて、直かえつて來た。^{すぐ}

「織田さんがちよつと来て下さいって……」

幾枝は、病室を出て、茶の間に行つた。離れの、薄暗い、薬品の匂いのこもつた圧迫的な病室とは別世界のようにこちらは明るい。長火鉢の傍の卓子に、菓子や蜜柑がどつさり出でている。下の男の子とそこに中腰をしていた織田が立つて夫人を迎えた。

「お呼び立てして恐縮でした。——実は今鈴木君や何かと話が出たんですが——どうしたもんでしょう」

袂を頭ごしはねのけて羽織の上から母の腰にまといついた末の子の肩を抱きよせながら、幾枝は、考え迷つたように呟いた。

「そうねえ」

「——先生のお心持はわかっているんですが——どうも外の場合と違うから」

「そうですよ、あとでまたね——じゃあこうして下さいませんか、私の名で一つ電報を出して置いていただきましょうか。来いなどといってやるには及びません、ただ知らせだけ。——どうぞ」

火鉢のところへ坐ると、手伝いに來ている幸子が、茶を注いで出した。

「——あつちもこつちもだからお大抵ではありますね、ほんとに。——暫く横ででもおんなさいまし、私あちらに参つておりますから」

「ええ、ありがと」

幾枝は、熱い番茶をのみながら、市原へ電報を打たせたことについて、こだわった気持になつていた。市原は、神戸で相当な請負業を営んでいる彼女の実弟であつた。幾枝にと

つては三人 同胞(きょうだい)の大切な一人なのだが、ひどく良人の荻村と氣質が合わなかつた。荻村は、仏文科出の小説家であつた。良人が第一流の芸術家として尊敬されるのは満足だが、神經の鋭さや、趣味のゆずらなさから、幾枝にすると、迷惑な場合も少くない。人格に圧されて承服はするが、本当に同感はされない。荻村の家庭における位置はそういうものであつた。市原との間のうまくゆかないのも、幾枝の氣持で判断すると、そういう目に見えない良人の癖が第一の原因であるらしかつた。然し、三四年前、長い間、今病室になつている書齋で相談した祐之助が、

「——どうも義兄(にい)さんには敵(か)わないや」

と、延した小指の爪で、髪のわけめを搔き搔き照れかくしの剽(ひょう)輕(うげ)た風で茶の間に出て来て以来、上京しても、ほんの申わけに顔を出すぎりになつた。しかも幾枝と話すだけで、彼女が、

「ちよつと見て来ましようか」

と立ちかけると、彼は大仰に両手でこれを制した。

「いいよ、いいんですよ、私はすっかり嫌われちまつたんだから——勘当(かとう)さ」

「冗談じやない」

「本当ですよ」

「——ほんと?」

すると、祐之助は、

「ハハハハハハ」

と咲笑した。その放蕩者らしい笑い声が書斎へ聴えないわけはなかつた。けれども、荻村は、彼については一言も発せず、竹田に似たようで更に敏感さのこもつた山水などを描いてゐる。

幾枝は、そのいきさつについては、絶対に沈黙を守つていた。男達は面倒なものだ。一二十年近い結婚生活で、彼女は、良人の内的生活には容喙しきれないもののあるのを承知していたのだ。

荻村の健康は常から苦情がちであつたが、風邪がこじれ、肺炎になつた。一進一退しているうちに、酸素吸入が必要にまで至つた。荻村は五十二歳であつた。……

空になつた湯呑を手のひらにのせ、幾枝は暫くすくんだようにしていた。が、時計を見ると、疲れた体を引立てるようにして立ち上つた。

「——皆でくたびれちゃつても仕様がないから、下の者にも代り合つて眠るように、あな

た世話をやいて下さいな。——さ、弘もおねなさい。あした学校でしよう」

幾枝は、建てましをしてからそこを城廊のようにして生活していた良人の書斎へ、暗い廊下づたいに戻つた。

二

祐之助は、身辺に旋風の袋を持つてあるいているような勢いで入つて來た。それは、荻村の臨終の翌日であつた。彼は、居並んだ人々にせわしく一わたり頭をさげると、すぐ幾枝に遅参を詫びた。

「——實に驚きましたね、前から悪かつたことなんぞちつとも知らなかつたんだから、全く、嘘かと思つた位だつた。家におりやこんな残念な目に合わないですんだんだが、ちょうど、悪い時には悪いことが重なるもんで、下関へ行つていましてね、停車場へ着換を出させてやつと駈けつけたという訳です、どうぞあしからず御容赦願います」

遺骸に敬意を表して座に戻ると、彼は、偉人の脳髄の目方は皆重いものだから、荻村のもかなりあるだろうなどと、声高に話した。

「さすが、何ですか、人格の出来ていた人だけに立派なものですね、堂々たるものなんだ。——先年英國へ行つたとき、シェクスピアの生れた村——ええと——何とかアボンつていつたが、あそこへ行つて現にシェクスピアが著作したという部屋を見たり、デス・マスクを見たりしましたが、いい記念ですね——」

彼は、思いついたように織田を呼んだ。

「——もちろん、ぬかりはないでしようが——何ですか、マスクを取らせましたか」

織田は、丁寧に、しかし簡単に答えた。

「どうしました」

「ああそれはよかつた。もしまだなら、石倉と懇意にしてるから一つ呼んで取らせようと
思いましてね——誰にさせました?」

「内海さんです」

祐之助は、

「ふむ、ふむ」

どうなずいた。

「あれならよからう」

納棺後、祐之助は、中学五年の長男に向つて、

「さて、これからが小一郎君のしつかりせんならん時だよ、父さんは偉い人だつたが、その跡をさらに立派に立てるのが君の責任だ。へっぽこな親父をもつたより骨が折れる。覚悟が出来てゐるかね？」

小一郎は、厭な顔でちよつと叔父を見たぎり黙つていた。

「何をやるかね、専門に」

「……」

小一郎の若々しい、純粹な反感を感じ、祐之助は苦笑を洩した。

「君も父さん似で、ちつと変つてるな」

夜になつて、十六の尚子が母親をぐんぐん納戸のところへ引つぱつて行つた。
「何ですよ」

「市叔父さん、永くいるの」

「なぜ？」

「だつて——あの叔父さん私嫌いだわ——」

尚子は、泣き膨れた眼で凝つと母親を睨むように見上げた。

「——皆いやがつてるわ——父さまだつて——」

といいかけ、精神感動の鎮まつていない尚子はわつと泣き出して母にきつくかじりついた。

「何だねえ——そんなこといつたつてお前——」

幾枝は、膝をかがめるようにし、尚子の腕ごしに眼頭の涙を拭きながら、当惑した気持になつた。尚子がいうより先に、彼女は、市原の周囲にやや不調和な存在を気にしていたのだ。さりとて、北海道の官吏に嫁している妹をのぞけばただ一人のともかく頼りになる弟である彼をどう出来よう。幾枝は、俄に死んだ良人の心をうけつぎ代表する子供等という感じに打たれながら尚子をたしなめた。

「いそがしい中を親切から来て下すつたのにかれこれいう人がありますか！」

三

葬儀をすまして帰りぎわにいい置いて行つたとおり、祐之助は三カ月ばかり経つて上京した時、一枚の設計図を持つて來た。彼は、故人が存生の頃どおり茶の間にあぐらをかきながら、

「どうです」

と、巻いたワットマンをひろげた。

「いいだろう」

それは、荻村の墓の図案であつた。祐之助は、生前故人をよろこばせられなかつた代り、墓だけは自分にまかせてくれと、やかましくいつて引受けたのであつた。

彼は、ポケットからエヴ・シャープを出し、

「よく御覧なさい、ここにほら一枚大きい石がはまつてゐるでしよう、ここがとりははずし自由で、内が龕になつてゐるというわけさ。——どうだね」

彼は、覗いている尚子にいった。

「立派なものだらう？ このとおりの色の大理石を使うんだぜ。型だつてなかなか凝つたものだよ」

尚子は、疑わしいような表情で、淡いチョコレートに黒の斑入り大理石を使い、イオニア式台石か何かかさばつた図案を見守つた。

「——この——御戒名書いたところ——こういう風にはすつかいになるの？」

「そうそう、ここが工夫したところだ。真つ直立つたのじや平凡だが、ここがこう羊皮紙

を巻きのばしたように——よくローマ人の絵にあるだろう——こうなつて、左右の下にどつしりこの台が出ている。これで、ただの墓じやあるいは立派なモニュメントになるのさ」

羊皮紙になぞらえたところに、故人の戒名と並べて幾枝の戒名も書いてあつた。

「どうです？ 文学者らしく堂々としていていいでしよう」

幾枝は、不決断に、

「そうね」

と答えた。

「よかりそうに思うけど——まあ一遍織田さん達にも見せなけりや——あの人達が何てい
うか——」

彼女は、悲しいような、詰らないような笑いを浮かべた。

「私の戒名なんか並べると、荻村にいやな顔をされそうだわ、何だか——」

「馬鹿いつちやいけない！」

祐之助は急に憤ったように遮つた。

「れつきとした荻村慶三郎の細君でありながら、なぜ戒名を並べていけないんです？ 第

一、何だ、姉さんは何ぞというと門下の人達を気がねしてゐるが、それが間違いさ。権限を

心得させて置かないとい、いまに途方もない奴が出るから——」

夕方、小一郎が帰つて来て、その設計図を見た。

「どう思うえ？ 小一ちゃん」

「親父らしくないや、ちつとも」

尚子が、我意を得たというように、

「お兄さんもそう思う？」

といつた。

「尚子もそう思つたんだけれど、——何ていつていいかわからなかつた」

やや暫らく黙つて眺めていたが、小一郎は母に尋ねた。

「きまつたの？ こうするつて」

「誰にも異存がなけりやこれになる訛さ。——お前、どつかこうしたいと思うところがあるの？」

小一郎はなぜかむつりして、人さし指で唇を弾いていたが、やがて、

「まあいいや」

と、あきらめたように立ちかけた。

「何だよ——いつて御覧よ」

「いい。母さんがいいと思えばいいさ」

小一郎には、母の戒名が並んでいるのが何だか変に感じられた。まだ生きている人でもあるし、子供時分からの印象によつて、書斎にばかりいた父、茶の間にばかりいた母、あんなにも内容の違う生活を営んでいた二人が、戒名を並べて納まるということが一種不自然なように感じられたのであつた。しかし、彼は、そのように感情上微妙な問題をどうい現わしてよいか判らず、沈黙した。

一周忌の法要のとき、祐之助がたんのうした立派さで原案通りの墓が出来上つた。彼は世話をやいて写真師を呼んだ。墓前に並んだ遺族一同のと、別に墓だけのを撮影させた。故人の人となりを熟知している知友はどういうものかその墓の前に立つと、故人の気品と皮肉の相半ばした生彩ある眼差しを思い浮べずにおられなかつた。それは、重苦しい自分の墓を横の方から眺めながら、

「こう発言権を褫奪され^{ちだつ}てはやりきれんね」

と、ゆつくり葉巻の灰をおとして、苦笑していそうに思われた。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第一巻」新日本出版社

1979（昭和54）年6月20日初版発行
1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第二巻」河出書房

1953（昭和28）年1月発行

初出：「サノティー毎日」

1926（大正15）年7月1日号

入力：柴田卓治

校正：原田頌子

2002年1月23日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

墓

宮本百合子

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>